

1 May 2025

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No. 24

画家ウィリアム・ニコルソン
——知られざるモダニズムの「父」

小野寺 玲子

昨年、本学会誌の編集長を引き受けたものの、力不足ゆえ委員をはじめ多くの会員諸氏のお力を借りたが、表紙の絵だけは勝手に好きなものを選んでしまった。「ヴィクトリア朝の／と人形」という 22 号の特集に掠る程度の関連で、小さな人型のもの——おそらくジャンピング・ジャックと呼ばれる、紐を引くと手足の動く玩具——を手にした行商人 (hawker) がこちらを見据える。背後には公園を散策する紳士淑女。木版画の力強い線で表現されたこの絵の作者は、ウィリアム・ニコルソン (William Nicholson, 1872-1949) という。日本でも翻訳されている絵本『ビロードうさぎ (The Velveteen Rabbit or How Toys Become Real)』(1922 年) や『かしこいビル (Clever Bill)』(1926 年) の画家として名前をご存知の方もいるかもしれないが、その経歴・画業はあまり知られていないと思うので、この場を借りて少し紹介しておきたい。



【図 1】

表紙の作品は、『ロンドン・タイプス (London Types)』と題する詩画集の中の 1 点である。他には新聞売りやバーの女給、ビーフィーターや近衛兵など、ロンドンで見られる特徴的な人物像が、詩とセットで合計 13 点収められており、木版画に手彩色のオリジナル版と、カラーリトグラフの普及版が、1898 年にハイネマン (Heinemann) から出版された。

当時ニコルソンは 26 歳という若さだったが、その前年に制作したヴィクトリア女王の肖像【図 1】によって、すでに一躍有名になっていた。78 歳を迎えた女王を、宝冠をつけた君主としてではなく、愛犬を連れて杖を頼りに散歩する老女として描いたこの版画は、在位 60 周年の記念版画として売り出すことを狙ったものだったが、ハイネマンは不敬と感じたのか、出版を拒否する。しかし捨てる神あれば拾う神ありで、当時『ニュー・レビュー』誌の編集者であった W・E・ヘンリー (William Ernest Henley) が、売れると確信して 6 月号の付

録に採用し、さらに7月号から12月号のために、サラ・ベルナール、J・M・ホイッスラー、ラドヤード・キプリング、セシル・ローズら著名人の肖像も注文した。果たして《ヴィクトリア女王》は大好評を博し、ニコルソンの出世作となったのである。

W・E・ヘンリーはその後、前述の『ロンドン・タイプス』に詩を書くことになる。一方肖像画の大ヒットこそ逃したもののハイネマンは、「A はアーティスト」で始まる絵本『アルファベット(An Alphabet)』(1897年10月)、『スポーツ12ヶ月(An Almanac of twelve Sports)』(1897年11月)、『ロンドン・タイプス』(1898年11月)と、続けてニコルソンの版画を掲載した書籍を世に出した。

こうして見ると、ニコルソンは版画家あるいは挿絵画家として順調にキャリアを築いたような印象を受けるが、ことはそう単純ではない。19世紀末までに、アーツ・アンド・クラフツの影響で純粋芸術と応用芸術の垣根が下がってきたとはいえ、やはりファイン・アートの優位性が人々の意識に残存していたであろうことは、数々の装飾本で名高いウォルター・クレインすら、グロヴナー・ギャラリーおよびニュー・ギャラリーに油彩画を出品し続けていたことから推測できる。1893年に『アーサー王の死(Le Morte d'Arthur)』でデビューしたオーブリー・ビアズリー(奇しくもニコルソンと同じ年)のように、最初から最後まで、今日でいうイラストレーターないしはグラフィック・アーティストとして活動し、かつその高い芸術性を評価された作者は例外なのだ。ニコルソンも本来は「画家」を目指していて、一時的に版画を生業として成功したものの、結局、油彩画中心の活動に戻っていったのである。しかも彼の画業には、木版画の前にもひと山あった。

経済的に恵まれた家庭に生まれたニコルソンは、オーソドックスな芸術教育を受けることができた。12歳から画家の個人レッスンを受け、16歳でロイヤル・アカデミー会員のヒューバート・フォン・ハーコマー(Hubert von Herkomer)が校長を務める美術学校に入学する。ハーコマーは雑誌『グラフィック』に挿絵を提供するとともに同主題の油彩画をアカデミーに送って成功した、社会派リアリズムの画家である。ただ相性が良くなかったのか、3年足らずで退学した(やめさせられたという説もある)。それよりこの学校で、結婚相手となる女性に出会い、その兄ジェイムズ・プライド(James Pryde)と親しくなったことが、ニコルソンのキャリアを左右したのだった。

ニコルソンと、6歳年上でやはり画家を志していたプライドの二人は、J&W・ベガースタッフ(Beggartstaff)というユニット名で、ポスターデザインを手がけるようになる。きっかけはプライドが知人の俳優エドワード・ゴードン・クレイグ(Edward Gordon Craig)から『ハムレット』のポスター【図2】を依頼されたことだとされるが、1894年にウェストミンスター・アクエリウムで開かれた国際ポスター展にこれを含む4点のデザインを出品したところ、非常に評判となった。当時はフランスのポスター隆盛の影響で、イギリスでもアーティスティックなポスターが開花しつつあったのだが、その中でも、単純明快なフォルムと平坦な色面で表現したベガースタッフのデザイン(実際に色紙を切り抜いて台紙に貼る、という手法でデザインした)はとりわけ大胆で、ロートレックやジュール・シェレといったフランスの花形アーティストを模倣していない、という点でも注目に値した。近年のポスター史研究においては、J&W・ベガースタッフ(またはベガースタッフス)の名前は、ビアズリーと並んで必ず言及されている。

しかしベガースタッフスの活動は2～3年で終わる。批評家からは絶賛され、専門誌『ザ・ポスター』や『ステューディオ』で紹介されたり、コレクター向けに印刷されたりはしたが、そのデザインを採用する企業は少なかったのだ。商品の特徴を細かく伝えたいクライアントにとっては、斬新過ぎたのだろう。ちなみにビアズリーがデザインしたアヴェニュー・シアターのポスターも、『パンチ』紙上(1894年4月21日)で'Ave a new poster'と揶揄されている。

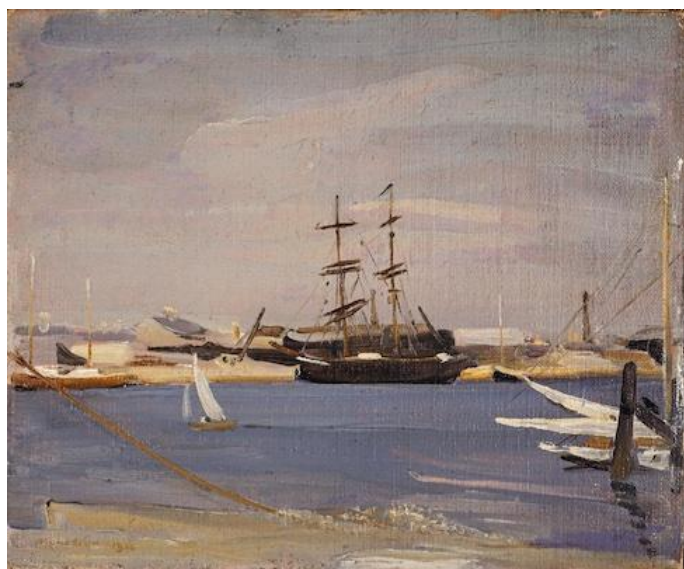
ニコルソンは1893年に結婚し、翌年には長男が生まれたこともあって商業的デザインに手を染めたと思われる。だからポスターでの収



【図2】

入が見込めないと踏むと、次の手を考えた。それが記念版画だったのである。そしてすでに見たように、彼は成功した。そのうえで 20 世紀に入る頃、あらためて油彩画に専念するようになる。やはり伝統的な意味での「画家」への想いが止み難かった、ということだろうか。知名度が高まって、経済的安定を得た上での再出発だった。

彼の油彩作品については、マネに似た静物画とホイッスラーを思わせる風景画、と評されることが多い【図 3】。最初に「あまり知られていない」と書いたが、日本ではそうでもイギリスにおいてニコルソンは無名の画家ではない。生前にナショナル・ギャラリーで回顧展が開かれたし、ナイトに叙せられてもいる。テイト美術館には複数の作品が所蔵されている。しかし近代絵画史の中で見た場合、キュビズムやフォーヴ、さらには抽象絵画へと著しい変革を見た 20 世紀前半に、印象主義の影響に留まっているように見えるニコルソンが、重要なポジションを与えられないのは致し方ないことだろう。



【図 3】 *The Brig*, 1906.
National Galleries of Scotland.



【図 4】

それにしても、油彩画と木版画、共作とはいえベガースタッフス時代のポスターデザイン、それぞれにスタイルが異なっており、多才といえば多才、少なくとも器用な画家である。ベガースタッフスの二人と交友のあったクレイグは、のちにニコルソンについて、アートのあらゆる技法に通じているうえに、ケン玉やビリヤード、自転車の曲乗り、剣術など、「眼と手と頭が完全に調和していなくてはならないような全てのことにかけて、この上なく巧みだった」と回想している。

またユーモアのセンスにも長けていたに違いない。彼のアルファベット絵本には、「F はフラワール」のように昔ながらの単語も含まれる一方、'B for Beggar', 'R is for Robber', 'E for Executioner', 'I for Idiot', 'T for Topers' など、およそ教育的によろしくなさそうな人物像が目白押しなのである（さすがに普及版では、E は Earl に、T は Trumpeter に差し替えられた）。しかも裸足でボロを纏った Beggar はジェイムズ・プライドの顔である【図 4】。杖（staff）を持った beggar で洒落のつもりだろうが、A のアーティストには自分の顔を描いて、義兄との関係がこじれなかったのか心配になる。

こうした（生来の？）諧謔味と、（ハーコマーの教育成果か）対象の本質を捉えたリアルな描写と、（プライドとの共作で磨いたか）平坦な白と黒との配置のセンス、これらが最も良いバランスで結実したのが、おそらく女王の版画なのであろう。誇張はあっても滑稽というより微笑ましく、振り向くテリア犬のように温かく見守る気持ちが喚起される。何より誰なのかすぐわかる。もっとも、経済的動機で制作したものが代表作とは、当人は不本意かもしれないが。さらにこれも本意かどうか、彼はある意味でモダニズムの「父」になった。長男のベン・ニコルソンが、抽象絵画を追求して国際的に活躍し、20 世紀イギリスの前衛を代表する画家の一人となったのである。



参考文献

- Campbell, Colin. *The Beggarstaff Posters: the work of James Pryde and William Nicholson*. Barrie & Jenkins, 1990.
- . *William Nicholson: the Graphic Work*. Barrie & Jenkins, 1992.
- Craig, Gordon. *Woodcuts and Some Words*. J. M. Dent & Sons Ltd., 1924.
- Hewitt, John. ‘The Poster and the Poster in England in the 1890’s’, *Victorian Periodicals Review*, vol. 35, no. 1(Spring 2002).
- Hiatt, Charles. *Picture Posters: a short history of the illustrated placard, with many reproductions of the most artistic examples in all countries*. G. Bell and Sons, 1895.
- Nicholson, Andrew ed. *William Nicholson, Painter: Paintings, Woodcuts, Writings, Photographs*. Giles de la Mare, 1996.
- Schwartz, Sanford. *William Nicholson*. Yale University Press, 2004.



和紙と万国博覧会

関 良子



2025 年 4 月 13 日～10 月 13 日には大阪・関西万博の開催が予定されている。ヴィクトリア朝文化を研究する者としては、万国博覧会と聞くと少しアンテナが反応し、関西で生まれ育った者としては、1970 年大阪万博の跡地にある（あった）万博記念公園やエキスポランドで遊び、遠足・社会見学などで国立民族学博物館や大阪日本民芸館に足を運んだことを懐かしく思い出す。ロンドンのサウスケンジントン地域を中心に、170 年あまりが経った現代にも残る 1851 年開催の第 1 回ロンドン万博後に残されたレガシーに思いを馳せると、万国博覧会が人の産業・文化の発展・保存・普及に果たした貢献には敬服の念を抱く。もとより万国博覧会が政治的な目論見のもと始まったことはヴィクトリア朝文化を研究する我々には周知の事実だが、一方で本年開催される万国博覧会が短期的な政治的算段のほかは何をレガシーとして残してくれるだろうか考えると、せっかく生きて目のあたりにできる万国博覧会の自国開催に、期待を持てずにいることを悔しくさえ感じてしまう。

と、後ろ向きなことばかりを最初書き連ねてしまったが、日本で万国博覧会が開催される 2025 年のニューズレターにエッセイを書く機会をいただいたので、私が近ごろ専門の研究の傍らで関心をもっている、万国博覧会と和紙のかかわりについて書かせていただきたい。

私が万国博覧会と和紙のかかわりに関心をもったきっかけは、明治期に和紙の改良・近代化に尽力した吉井源太（1826～1908 年）という人物を知ったことであつた。土佐藩の御用紙漉職人の家に生まれた吉井の生没年の間には、ヴィクトリア朝がすっぽりに入る。既に幕末の 1860 年に大型簀桁^{すけた}を考案することで和紙の生産効率を高めた吉井は、明治維新を境に土佐藩や徳川幕府に献上する紙を漉く義務が廃止され、一方では洋紙が輸入されるようになると、和紙の需要を維持し、さらには拡大するために、ますます和紙の改良と発明に尽力する。いくつか例を挙げると、1874 年に発明したインキ止紙は毛筆からペンへと筆記用具が変わりつつある時代に需要が高く、極薄書簡用の郵便半紙は郵便物の軽量化を可能にした。ほかには防火紙・防寒紙などの軍需用品の発明もあり、日清戦争・日露戦争で活用された（関 228）。

高知県の町紙の博物館には、展示室に入ってすぐのところに吉井源太について紹介するブースがあり、吉井が万国博覧会および内国勸業博覧会で受賞した賞状とメダルの数々が並べられている。吉井は、1885 年ニューオリンズ万博、1889 年パリ万博、1893 年シカゴ万博、1900 年パリ万博に出品し、受賞している（1900 年は出品ではなく原案に対する受賞）。その小さな展示ブースに 19 世紀末の産業化の歴史の一端が垣間見られる気がして、初めて博物館で目にした時にはワクワクした。

吉井源太の発明品で特に注目されるのは、コピー紙と土佐典具帖紙である。前者は 1877 年に開

発されたもので、1780年にジェームズ・ワットが考案したコピー・プレス（圧写機）への使用に適したことから、この名が付けられた。原本にあるインキ文字・図版を効率よく写し取るには、薄くて滑らかで圧力に耐えうる丈夫な紙が必要である。16枚の紙に一度に転写することを可能にした吉井のコピー紙は評判を呼び、1884年に輸出が始まり、1890年にピークを迎えた（村上 36-37, 156-68）。また、薄くて丈夫な特長をもつ土佐典具帖紙は、1870年代に商品化が始まったタイプライターへの使用に適すると評判を得、その受注は第二次世界大戦が勃発するまで長く続いたという（関 229）。このことを初めて知った時には、19世紀末から20世紀初頭にかけて、タイプライターで執筆した小説家——例えばマーク・トウェインやアガサ・クリスティーらは、ひょっとしたら和紙を使用していたのかもしれないと妄想を膨らませたものである。

最近になって知ったのは、ヴィクトリア朝期に和紙に関心を寄せた西洋人たちは、丈夫で薄い紙だけに関心があった訳ではないということである。そして私自身の和紙への関心は、自分の研究領域から少し離れたところから生じたものだったが、意外にも私が近年、研究対象として注目していた人物とつながった。それはウォルター・クレインである。

挿絵画家や絵本作家としてよく知られるクレインは、1891年に『ルネサンス』(*Renascence: A Book of Verse*)という詩集を出版している。自作の詩に章頭飾り(headpiece)や章末飾り(tailpiece)を施した、アーツ&クラフツ精神が光る書物である。この詩集の出版広告がV&A博物館のオンラインコレクションに収録されているが*、それによるとクレインはチズウィック・プレスから3種類の形態で出版する予定とある。すべて手漉きの紙に印刷したもので、大型四折本が65部、十六折本が350部、そして和紙に印刷したものが25部である。この広告ではJapanese paperと書かれているが、別の箇所ではクレインはJapanese vellumという単語を使っている。Japanese vellumとは「局紙」と呼ばれるミツマタを原料に作られた和紙で、1877年に開発、パリ万博に出品され、美しく粘り強い性質が評価された。1919年のヴェルサイユ条約の正文用紙に使われた紙としても知られる（久米 151）。

ここで再び吉井源太に話を戻すと、吉井が1885年ニューオリンズ万博に出品したのは「ドウサ漉入れ図写紙」であった。ドウサとはミョウバンとニカワの溶液で、これを漉入れると滲み止めになり、墨の発色がよくなる（久米 276）。ドウサについてはウィリアム・モリスの「ケルムスコット・プレス設立趣意書」（1898年）にも登場する。美しい書物を作るには手漉紙を使わなければならないと考えたモリスは、第一に「非常に「堅い」もの、すなわち^{しづみ}磐水が十分に引かれているものでなければならない」、第二に「紙は「織目型」ではなく「^{すのめ}簀目型」でなければいけない」という2つの条件を挙げている（モリス 186）。（ここに書かれた磐水に関する表現については、本稿の最後で再び話題にしたい。）結局モリスは、「持説が15世紀の製紙業者の流儀と同一である」ことを知り、「1473年頃のボローニャの紙を自分の手本とすることにした」のだが（188）、モリスの盟友であるクレインは、和紙での製本も試みたのである。

実はクレインが『ルネサンス』を刊行した1891年春は、ケルムスコット・プレスによる最初の出版『輝く平原の物語』の時期とピタリと重なる。クレインがどの和紙で印刷したのかまでは辿れていないが、品質にこだわるアーツ&クラフツ運動の盟主であったことを考えると、吉井らが開発した「ドウサ漉入れ図写紙」であった可能性もゼロではなかろう。同時に、状況を考えるとモリスもどこかで和紙を目にしたことがあるはずなのだが、彼の資料を見てもどこにも和紙あるいはJapanese vellumへの言及がない点も興味深い。同時代のオスカー・ワイルドらに関心を見せたジャポニズムに、モリスは無関心だったことを考えると、彼の目は専らヨーロッパに向いていたのだろう。

日本政府が万国博覧会に正式に出品したのは1873年ウィーン万博が初めてのことで、このとき出品され蒐集された和紙は、1998～1999年に「19世紀の和紙展——ライプチヒのコレクション帰朝展」として日本で巡回展示された。しかし、それ以前の1862年ロンドン万博でも日本展示コーナーが設置され、初代駐日公使ラザフォード・オールコックが幕府に依頼して出品した品々の中には、和紙も含まれていた。2代目駐日公使のハリー・パークスもまた、1869年にウィリアム・グラッドストーン首相の命を受けて「日本の紙生産についての報告」(*Reports on the Manufacture of Paper in Japan*)を作成し、400余りの和紙サンプルと共に本国へ送ったというから、和紙とヴィクトリア朝のかかわりは思った以上に深いものであるようだ。

最後に、モリスの「ケルムスコット・プレス設立趣意書」の中にあったドウサについての表現に立



ち戻りたい。この箇所の原文は、第一の条件は “the paper [. . .] must be quite ‘hard,’ i.e., thoroughly well sized”、第二の条件は “it must be ‘laid’ and not ‘wove’”とある(Morris 75)。先ほどは川端康雄先生の翻訳書から引用したが、ここには訳注が付いていて、翻訳に「礬水」「織目型」「簀目型」という紙漉きの専門用語を使用したのは寿岳文章の既訳を踏襲したと書かれている(モリス 287n ; 寿岳 109)。size という単語を *OED* で調べると “A glutinous or viscid wash applied to paper, parchment, etc., to provide a suitable ground for gilding, painting, or other work.” と定義され、1440 年頃～1763 年に使われた廃語だと説明されている。確かにモリスが手本とした初期印刷技術で使われた薬品のようなのだが、ドウサという和紙の材料を訳語に充てた寿岳の製紙技術への造詣は見事である。

寿岳文章といえばウィリアム・ブレイクなどの研究で知られる英文学者と認識していた私は、寿岳が和紙研究家でもあったことを知り驚いたが、この分野については本学会の前会長中島俊郎先生が近ごろ多くの研究成果を発表されている。有栖川宮記念学術奨励金を得た寿岳は、1937～1940 年に全国の和紙産地を調査してまわり、その成果を『紙漉村旅日記』(1943 年) にまとめた。寿岳の和紙研究の根幹には書誌学への関心があり、そのきっかけはロナルド・マッケンローの『文学研究者のための書誌学入門』(*An Introduction to Bibliography for Literary Students*, 1927) を読んだときの衝撃にあると中島先生は説明する。「そこには文学作品の本文テキストを決定するためには、一見無関係とも思われる印刷機構の細部なども深く関係することが説かれていて、文献研究には出版に至るまでの精密な考究が必要であるのを知った」(中島 63–64)。さらには「書物が好きでいろいろやっているうちに書物のいちばん大切な材料の紙にぶつかったのです」という寿岳自身の言葉も引用している(中島 64)。横好きのように始まった私の和紙への興味だったが、和紙と万国博覧会、和紙とヴィクトリア朝、和紙と文学研究は、離れているようで強い繋がりをもつのかかもしれない。

ちなみにこのエッセイで引用した中島先生の論文は、2021 年に行われた国際シンポジウム「20 世紀の和紙——寿岳文章 人と仕事——」に基づく。コロナ禍でオンラインで行われたようだが、たいへん有難いことに、向日市文化資料館のデータベースに所蔵され、今も視聴することができる**。関心を持たれた方は、ぜひご覧になっていただきたい。

【参考資料】

久米康生『和紙文化研究事典』法政大学出版局、2012 年。

寿岳文章『書物とともに』布川角左衛門 編 富山房、1980 年。

関良子「「紙」から見える文化史と民芸精神——吉井源太とウィリアム・モリスの比較試論——」岩佐和幸ほか 編『越境スタディーズ——人文学・社会科学の視点から——』リーブル出版、2015 年、pp. 225–241。

中島俊郎「寿岳文章の和紙研究」『甲南大學紀要 文学編』第 172 号、2022 年、pp. 63–76。

村上弥生『明治の和紙を変えた技術と人々——高知県・吉井源太の活動と交流』南の風社、2020 年。

モリス、ウィリアム『理想の書物』ウィリアム・S・ピータースン 編／川端康雄 訳 筑摩書房、2006 年。

Morris, William. *The Ideal Book: Essays and Lectures on the Arts of the Book*. Edited by William S. Peterson, U of California P, 1982.

展覧会図録『19 世紀の和紙展——ライプチヒのコレクション帰朝展』日本紙アカデミー 編集、1998 年。

動画資料「国際シンポジウム『20 世紀の和紙——寿岳文章 人と仕事——』」「バーチャル展覧会『寿岳文章 人と仕事——向日庵と和紙の旅——』向日市文化資料館 収蔵資料等データベース

“Size, *N.* (2), Sense 1.a.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2024, <https://doi.org/10.1093/OED/1117830070>.

* <https://collections.vam.ac.uk/item/O708236/renascence-a-book-of-verse-advertisement-walter-crane/> (最終閲覧日：2025 年 3 月 19 日)

** https://jmapps.ne.jp/muko/det.html?data_id=2977&data_idx=0 (最終閲覧日：2025 年 3 月 19 日)





日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2024 年度総会

日時：2024 年 11 月 23 日（土）17 時 10 分～17 時 30 分

場所：上智大学四谷キャンパス 6 号館 405 号室（司会 石川大智事務局長）

議題

【報告事項】

1. 2024 年度活動報告・活動予定

I. 運営委員会、役員会関係

運営委員会・理事会

2024 年 11 月 21 日 第 1 回 運営委員会・理事会（Zoom 開催）

大会企画・準備委員会

2024 年 8 月 2 日 第 1 回 大会企画・準備委員会（Zoom 開催）

2025 年 2 月 3 日 第 2 回 大会企画・準備委員会（Zoom 開催）

学会誌編集委員会

2024 年 10 月 第 1 回 編集委員会（メール審議）

II. 学会誌、ニューズレター

2024 年 6 月 1 日 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 23 発行

2024 年 12 月 24 日 『ヴィクトリア朝文化研究』（*Studies in Victorian Culture*）第 22 号発行

2. Newsletter について

上記の通り、発行された旨報告があった。

3. 学会誌について

上記の通り、発行される旨報告があった。

4. その他

◎会員動向 対象期間：2023 年 4 月 1 日から 2024 年 3 月 31 日まで

新規入会者 6 名 退会者 16 名

2024 年 3 月 31 日現在 会員 297 名

III. 全国大会関係

2024 年 11 月 23 日 第 24 回全国大会（対面、上智大学四谷キャンパス）

【審議事項】

1. 2023 年度決算

資料に基づき報告され、了承された。

2. 2024 年度予算案

資料に基づき報告され、了承された。

3. 2025 年度大会開催について

資料に基づき報告され、了承された。

2023 年度決算報告書（2023.4.1-2024.3.31）

単位：円

【収入の部】

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	6,760,161	
利子	10	ゆうちょ銀行（総合口座）より
出展料	0	
学会費	1,702,000	
学会誌販売	5,000	ご購入分（会員 1 名）
合 計	8,467,171	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
通信費	70,326	振込票や学会誌送付に係る郵送費
大会経費	122,931	大会講演講師謝礼、ポスター代等
懇親会費	0	
サーバーレンタル代	10,381	更新料含む
学会誌作成、郵送費	790,753	大日本法令印刷株式会社さまへ依頼
学会誌用図書費	156,890	書評図書
振込手数料	760	振込、振替時に生じる手数料
消耗品費	473	コピー用紙、インク等
役員会費	0	会場費
役員交通費	0	
非会員謝礼、交通費	0	学会誌書評執筆者×0 名
学生会員奨励金	30,000	大会発表学生会員×3 名
事務局員謝礼	240,000	月 ¥10,000×2 名
雑費	1,954	剽窃問題調査費用として
会費過入金返金	6,000	会費過入金のご返金（会員 1 名）
合 計	1,430,468	

	次年度繰越金	現在高
ゆうちょ銀行（総合）	1,011,746	1,011,746
ゆうちょ銀行（振替）	6,024,957	6,024,957
合計	7,036,703	7,036,703

以上の通りご報告いたします。

2024 年 11 月 22 日 会計 玉井 史絵

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2024 年 11 月 22 日 会計監査 並河 葉子

2024 年度予算案 (2024.4.1-2025.3.31)

単位：円

【収入の部】

項 目	金 額
前年度繰越金	7,036,703
利子	138
学会費	1,682,000
学会誌送付手数料	5,000
大会補助金	0
合 計	8,723,841

【支出の部】

項 目	金 額
通信費	70,000
大会経費	82,775
懇親会費	40,000
サーバーレンタル代	12,100
学会誌作成、郵送費	851,655
学会誌用図書費	200,000
振込手数料	2,000
消耗品費	5,000
役員会費	0
役員交通費	0
大会講演・シンポジウム謝礼（非会員）	30,000
学生会員奨励金	10,000
アルバイト謝礼	20,000
学会誌執筆謝礼	30,000
事務局員謝礼	240,000
雑費	2,000
会費過入金返金	8,000
合 計	1,603,530

次年度繰越金	7,120,311
--------	-----------

合 計	8,723,841
-----	-----------

本予算案は対面での大会開催を想定した最新版です。



第 25 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 25 回大会は、2025 年 11 月 8 日（土）に名古屋学院大学で対面形式にて開催予定です。

「文化の移植——越境と変容」（仮題）というシンポジウムを予定しております。司会は栗野修司氏（元佛教大学教授）、パネリストは石戸信也氏（兵庫県立尼崎高等学校講師、元県立博物館員）、唐戸信嘉氏（白鷗大学）、島貫悟氏（慶應義塾大学・東北大学他非常勤講師）です。

特別講演は、博物館明治村（愛知県犬山市）館長の中川武氏にお願いすることになっております。ご講演タイトルは「移築と文化の移植——ラフカディオ・ハーンの日本居住をめぐって」（仮題）で

す。(なお、大会翌日に博物館明治村へのエクスカーションを予定しております。)

第25回大会で研究発表(発表時間30分、質疑応答15分)を希望する会員は、発表要旨(400字)と略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)および主要業績を記したWORDファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後3日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。

締め切りは2025年7月10日(木)必着です。

本学会は学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10,000円を支給いたします。(ただし、この補助を受けた会員は大会後最低2年間、会員として在籍しなくてはなりません。)詳細は、事務局までお問合せください。

懇親会、その他大会の詳細につきましては、今後適宜学会メーリングリストにてご連絡をさしあげる予定です。

第26回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2026年11月に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第26回全国大会(開催場所と日時は8月以降に決定される予定です)における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ2時間30分程度(15分の休憩を含む)の時間枠を予定しております。

締め切りは2025年10月末日必着といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会(2026年末に開催予定)で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締め切り：2025年10月末日必着

2. 申請方法：下記の申請必要記載事項を記入したWORDファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。

3. 申請必要記載事項

①シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル

②趣旨(400字程度)

③企画立案者(氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス)

④プログラム：1)司会者(氏名、所属) 2)報告者(氏名、所属) 3)各報告者の題目および報告要旨(200字程度) 4)タイムテーブル(全体で2時間30分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください。)

*シンポジウム、ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、学会の規程等に則り、謝金および必要経費等を適宜お支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com

編集後記

第24号には、会員の小野寺玲子先生と関良子先生が、ご多忙なか玉稿をお寄せくださいました。両先生と、ニューズレター作成にご協力いただいた諸先生方に、深謝申し上げます。世界各地の紛争のニュースが絶えませんが、このような時こそ、学問や文化の灯を絶やさずにいたいものです。(NL 担当 若名咲香)

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室

(英語) 石川大智研究室内

TEL：045-566-1133

E-mail：victorianstudiesjp@gmail.com

発行日：2025年5月1日